

金児の宗教観尺度を用いた 日本人大学生の宗教観の考察

—1991年との比較—

徳 増 平
森 田 敬 史
谷 山 洋 三

背景

現在、日本人の宗教観を測定する決定的な尺度は存在していない。先行研究¹⁻²⁴ではいくつかの尺度が用いられているが、継続的に使用されているものはほぼ存在していない。これは日本人の宗教観が特定の宗教を信仰するのではなく、仏教、神道、そして民間信仰などの多面的な信仰を有しているために、単一の尺度のみでの測定が困難であるからかもしれない。先行研究では特定の宗教の信者や宗教者のみを対象としているもの^{2,10,11,13,18,25}があり、それは対象者の宗教性を均質にするためであったと思われる。

しかし、本当に日本人の宗教観を測定することは困難なのであろうか。確かに上述の通りの困難さはあるかもしれないが、例えば対象者を特定の年代に絞ることで、ある年代の宗教観という限定的ではあるが広範な対象の宗教観を測定することができるかもしれない。例を挙げれば、金児が1991年に関西都市圏の大学の学生に対して実施した調査²⁴では、参加者の宗教観を3因子の尺度で表現することができている。この尺度では後述するように大学生の宗教観を向宗教性、靈魂観念、加護観念といったそれぞれ独自の解釈で宗教に対して抱いている思いを複数の項目で測定している。このようにある程度条件を絞り込めば日本人の宗教観というのは測定可能なものにすることができる。実際、金児の尺度はその後も複数回用いられており^{9,15,18}、大学生を対象とした研究は2010年に行われたもの¹⁵まで存在する。しかしながら、金児の尺度を用いて大学生の宗教観を測定した実験は全て関西圏の学生を対象としており、また2010年以降のものは見つけれなかった。

そこで本実験では東北地方に存在する大学である東北大学の大学生・大学院生を対象に、最初期の研究である1991年の金児の調査結果²⁴を基に、大学生の宗教観を比較し考察する。

方法

2022年2月に東北大学の日本人大学生・大学院生を対象に、Zoomを用いたオンラインでの経文聴取効果測定実験を行った。その際にGoogle Formsで後述する宗教観やその他の心理学的項目に対して、回答を求めた。なお本論文では効果測定実験については詳述しない。

参加者

本実験への参加者を以下の条件で募集した。1. 東北大学に在籍する大学生、もしくは大学院生であること。2. 国籍が日本であり、日本で生育した日本人であること。3. 過去半年以内に精神疾患に罹患しておらず、また治療もしていない者であること。これらの条件設定は宗教観を測定する際に、各参加者間の文化的、宗教的背景を均質にし、20歳前後の学生で構成されている東北大学という作為的な空間ではあるが、それでもなお極力無作為に参加者を抽出するために行われた。まず、東北大学は国立大学法人であるため、何らかの宗教法人と関わりを持ってはいない。そのため、参加者の学生の宗教的背景は均質になりやすく、同年代の平均的な宗教観が測定可能であると予想した。同様に、日本人であることも、参加者の文化的背景を均質にしやすいために限定した。最後に、参加者が何らかの精神疾患を罹患している、もしくは最近まで罹患していた場合、平均的な宗教観を抽出することが困難になる可能性があるため除外した。

実験方法

本実験は全てオンライン会議ツールであるZoomを用いて実施した(図1)。事前に参加者に当日用いるZoomのウェビナーのURLをメールで配布した。実験当日、参加者はURLにアクセスし、研究実施者から実験内容の概説を聞いた後、同意できる場合のみ実験に参加した。同意後、参加者はGoogle Formsを用いた1回目の質問紙に回答するよう指示された。1回目の質問紙では以下

の項目について回答が求められた。視聴機器、年齢、学年、性別、親しんでいる宗教の有無、死別体験の有無、不安尺度である日本語版 STAI²⁶、心理的特性を測定する尺度である Big-5の短縮版である日本語版 TIPI-J²⁷、金児の宗教観尺度²⁴、読経の際に僧侶の存在がどれほど経文聴取に影響するかを調べるために研究実施者が制作した対面性尺度を測定した。

なお、本論文では宗教観因子の結果のみ提示し考察する。

回答終了後、参加者に経文聴取介入を実施し、介入後2回目の質問紙回答を行った。本論文では詳細は省略する。

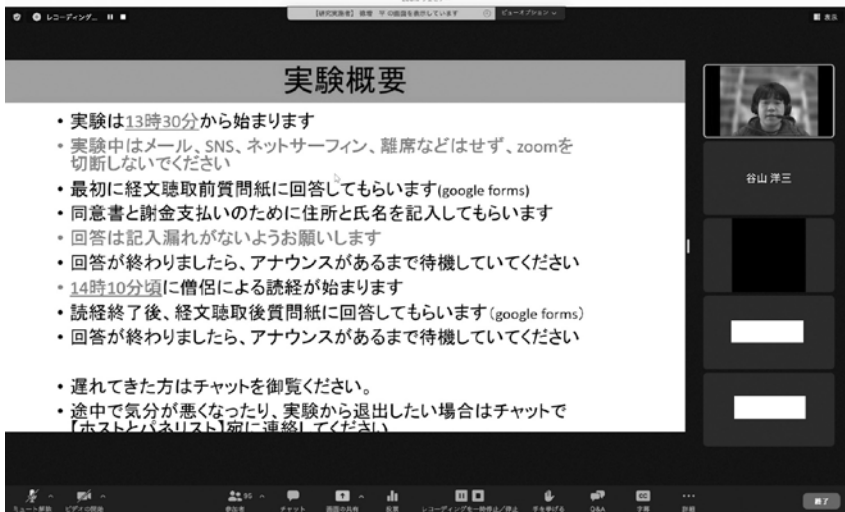


図1 オンライン実験画像
右上が研究実施者である筆頭著者。中央画像が参加者に提示されており、実験概要を説明している。

宗教観尺度

本実験では1991年に金児が作成した宗教観尺度²⁴を用いる。この尺度は367人の関西都市圏の大学の学生を対象に行われた調査で作成され、29項目3因子構造という結果となっている。因子はそれぞれ向宗教性12項目、靈魂観念8項目(因子負荷量0.400未満が1つ含まれている。「山・川・草・木などに自然の霊が宿っているように感じることもある」)、加護観念9項目であった。ここで言う向宗教性とは「常識的な意味での宗教、つまり教団・教義・戒律といった

目に見える要素から成る宗教に対する態度」, 靈魂観念とは「靈的存在への信仰, 死者への畏怖の感情, あるいは願いごとをかなえてくれたり, 祟りや罰を与えたりするような人知を超えた存在に対する畏怖の念, あるいは輪廻転生を信じること, そうした観念の複合したもの」, 加護観念とは「風俗や年中行事としての軽い宗教との結びつきに親しみを感じ, 自然にも敬虔な気持ちをもった宗教性」と金兎は説明している²⁸。

実験では29項目のそれぞれに対し, 「まったく反対」から「まったく賛成」までの6件法での回答を求めた。

なお, 一部項目は現代ではあまりなじみがなく, 参加者が理解できない可能性を考えて注釈を入れてある(図2)。

	まったく反対	かなり反対	どちらかといえは反対	どちらかといえは賛成	かなり賛成	まったく賛成
宗教は心身のよい修養になる	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
仏様や神様を信心して願いごとをすれば, いつかその願いごとがかなえられる	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
水子供養はするべきである(水子とは中絶 墮胎 流産 死産などで, この世に生まれ来ることが出来なかった子どものこと)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
人は死んでも, 繰り返し生まれ変わるものだ	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
お盆などの昔からの宗教的行事には親しみを感ずる	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

図2 質問紙の例
水子供養の注釈挿入部分を抜き出している。

統計的手法

金児の宗教観尺度は29項目3因子の尺度（ただし因子負荷量を絶対値0.400以上とすると28項目になる）であるが、本実験では29項目の回答を再度因子分析にかけ、因子数の探索から行った。得られた宗教観尺度の結果に対してスクリープロットを作成して因子数を決定し、その因子数をもとに最尤法及びプロマックス回転を行い、項目すべてが十分な因子負荷量（絶対値0.400以上）を持った因子構造が得られるまで因子分析を繰り返し実施した。

全ての統計解析にはEZ³¹を使用した。EZはRおよびRコマンドの機能を拡張した統計ソフトウェアである。

倫理的配慮

本研究実施にあたり、東北大学大学院文学研究科調査・実験倫理委員会の許可を得た（申請番号20220116）。

参加者には事前及び実験直前に、回答したくない設問には回答しなくても問題ないこと、途中気分が悪くなったりした場合はいつでも退出できることを説明した。体調が優れない参加者には看護師の面談を受けることができることも説明した。

結果

実験参加者は89人であった。この内、経文聴取前後に実施した質問紙調査に完全回答していた73人（82%）を本実験の対象者とした。参加者の平均年齢は 22.33 ± 5.49 歳であり、男性34人、女性39人であった。親しんでいる宗教は特になしが54人、仏教が15人、キリスト教、神道がそれぞれ2人であった。死別体験のある参加者は43人であったが、体験した年代が小学生の時もあれば、実験を実施した年である2022年にあるなど多岐にわたっていた。

因子分析の結果を表1に提示する。因子数の特定については、スクリープロットでの固有値の減少程度、解釈可能性から3因子と判断した。因子分析の結果から、29項目のうち十分な因子負荷量を示さない4項目（「1. 信仰をもつことによって、人生の目標が与えられる」、「10. 祖先崇拜は美しい風習である」、「15. 昔からのしきたりや年中行事には抵抗を感じる」、「18. 冠婚葬祭を円滑に行うためには宗教は必要である」）が除外され、25項目3因子の構造が得られた。

表1 宗教観尺度因子分析結果
(N = 73 最尤法, プロマックス回転) 左の数字は出題番号

	I	II	III
第I因子 靈魂観念(クロンバッハのα: 0.88)			
27. 神や仏をそまつにするとばちがあたる	.87	-.10	-.12
12. 死者の供養をしないとたたりがあると思う	.83	.04	-.25
24. 人は死んでも、繰り返し生まれ変わるものだ	.65	.02	-.08
23. 水子供養はするべきである(水子とは中絶 墮胎 流産 死産などで、この世に生まれ来ることが出来なかった子どものこと)	.64	-.44	.11
4. 地獄・極楽というのは迷信である	-.63	.10	-.22
11. 死後の世界はあるように思える	.62	.18	-.19
22. 仏様や神様を信心して願いごとをすれば、いつかその願いごとがかなえられる	.58	.27	-.12
25. お盆などの昔からの宗教的行事には親しみを感じる	.50	-.05	.24
17. 山・川・草・木などに自然の霊が宿っているように感じる	.47	.28	.15
9. 観音さんやお不動さんに親しみを感じる	.44	.30	.11
7. 氏神の祭りは、地域の結びつきを高めるのに必要である	.43	-.19	.25
29. お寺、神社、教会などから安心感を得ることができる	.42	.15	.31
第II因子 期待観念(α: 0.79)			
5. 信仰心のない人は、心の貧しい人である	-.24	.81	-.01
28. どんなに科学が進んでも、人間は信仰がなければ幸せになれない	.07	.64	.04
16. 宗教を信じていなくても、幸福な生活を送ることができる	.08	-.61	.10
26. よい生活を送るためには、何らかの宗教的信仰が必要である	.10	.58	.16
2. 信仰に裏打ちされた生き方こそ、人の真の生き方である	.15	.58	-.10
8. 信仰をもっていれば、死に直面しても安らぎの気持ちを持つことができる	.06	.47	.16
第III因子 利益観念(α: 0.75)			
13. 宗教を信じても何の利益もない	.33	.06	-.78
21. 宗教は心身のよい修養になる	-.12	-.03	.69
19. 宗教が人生の意味を明らかにしてくれることはない	.00	-.10	-.63
14. 神社の境内にいと心が落ちつくことがある	.14	.10	.54
20. 宗教によって、自己の存在の意味が教えられる	-.01	.33	.50
6. 針供養などの昔からの宗教的行事は、無意味な風俗である	-.19	.21	-.46
3. 宗教は、社会の道徳を確立し、維持していくのに必要である	.04	.03	.41
因子間相関			
I	-	0.25	0.30
II	0.25	-	0.27
III	0.30	0.27	-

本結果では3因子構造が得られたが、金児の先行研究²⁴での3因子（靈魂観念、向宗教性、加護観念）には単純に分類されなかった。第1因子は12項目で構成されており、そのうち8項目（下表の27,12,24,23,4,11,22,17。以下同様）が先行研究では靈魂観念に属し、4項目（25,9,7,29）が加護観念に属していた。第2因子は6項目で構成されており、6項目全てが向宗教性で構成されていた。第3因子は7項目で構成されているが、そのうち5項目（13,21,19,20,3）が金児の宗教観尺度の向宗教性に属し、2項目（14,6）が加護観念に属していた。靈魂観念については先行研究²⁴同様に存在しているが、向宗教性及び加護観念は分割されており、同因子として決定することはできなかった。

考察

因子分析の結果から、先行研究²⁴とは異なる因子が確認された。それぞれ第1因子を金児の呼称にならい「靈魂観念」、第2因子を宗教に対する社会的な期待に着目し「期待観念」、第3因子を宗教から個人が得られる利益に着目し「利益観念」と呼称する。

第1因子に関しては先行研究^{15,24}で靈魂観念とされたものがすべて入っていたことと、靈魂観念の特徴である霊的存在への信仰が、「観音さんやお不動さんに親しみを感じる」、「氏神の祭りは、地域の結びつきを高めるのに必要である」にも当てはまることから靈魂観念と決定した。第1因子の特徴は人知を超えた存在を前提としているものが多く、これは現代の大学生にも共通した考えであることがうかがえる。また、「神や仏をそまつにするとばちがあたる」、「死者の供養をしないとたたりがあると思う」など、宗教的意識から来る不利益に対しては因子負荷量が高いことから、他の因子でも説明できるように、大学生は宗教からもたらされる損得に敏感であることがわかる。

第2因子に関しては、すべての因子が先行研究^{15,24}で向宗教性とされたものであるが、中でも特に宗教に対して人が持つ社会的な期待を反映しているように考えられたため、期待観念と新たに呼称した。これは宗教を信仰した先にある何らかの状態を期待したものであり、直接的な何かを求めているわけではないため、第3因子と区別した。また、第3因子との違いとして、こちらは人間全体、人間社会が主体となっている項目が多いことから、自分を含む共同体にとっての宗教から得られる利益の期待が現れていると考えられる。さらに

第2因子の特徴としては、主に生活に関する項目が多いことが挙げられる。「28. 幸せになれない」、「16. 幸福な生活」、「26. よい生活」、「2. 真の生き方」などどれも人間が宗教を信仰し実践した先に存在するあり方を示している。これはすなわち、上述した、信仰した先にある何らかの状態そのものことであると考えられる。

第3因子に関しては特に強く影響が現れていた、「13. 宗教を信じても何の利益もない」という因子から利益観念と呼称した。先行研究²⁴では向宗教性と加護観念に分類された項目で構成されており、特に向宗教性であった項目の因子負荷量が高い。しかし因子負荷量の観点では、同じく向宗教性で構成されていた第2因子とは明確に区別することが可能であり、実際に第2因子の因子負荷量が非常に小さい。第2因子との違いとしては、第3因子は主に回答者個人にとっての宗教から得られる利益に着目している点にある。これは、自らが宗教を信仰する、実践する、触れるという具体的な行動に対して宗教が何を与えるのかについて言及されている項目が多いことから示唆されている。「21. よい修養」、「19. 人生の意味」、「14. 心が落ち着く」、「20. 自己の存在の意味」というのは人間社会そのものに対しての結果ではなく、個人が信仰したことで得られる個人的な現象である。

除外された4項目の内「昔からのしきたりや年中行事には抵抗を感じる」は小川の研究¹⁵でも除外されていた。このことから2010年から2022年までの間に学生の持つしきたりなどに関するイメージは不変であったと思われる。一方、他の3項目については金兎の研究では向宗教性と加護観念、小川の研究では靈魂観念や加護観念に属していた。このことは現代の学生にとって宗教の機能の一つである人生目標の設定、祖先崇拜、冠婚葬祭はイメージできないものに変化したと考えられる。

以上から、大学生にとって宗教とは、靈魂観念で表されるような抽象的な信仰という要素と、より具体的なものとしての利益、特に自分が属する集団もしくは自分自身にどのような利益をもたらすのかという2種類の要素と3種の構造が重要となる概念となっている。ただし、靈魂観念においても、「27. ばちがあたる」、「12. たたりがある」、「4. 地獄・極楽」、「11. 死後の世界」、「22. 願い事がかなえられる」などの損得に関わる項目の因子負荷量が高い傾向にある。

参加者の74%が信仰を特に持っていなかったことは、今回の実験の結果を補強する材料になる。本実験では73人中54人が親しんでいる宗教は特にないと回答しており、親しんでいると最も多く回答された宗教の仏教に関しても15人(21%)しかいなかった。この数値は、2018年に行われた調査で、全国の18-39歳では仏教の信仰率が17%であった²⁹ことから、全国平均と類似した結果となっている。すなわち参加者のほとんどが特定の信仰を持っていなかったことから、上述したように宗教に対して抱いている思いが抽象的で曖昧なものになっており、先行研究^{15,24}でいう向宗教性や加護観念が弱まっていることと関係していると考えられる。

本実験では金児の研究²⁴で加護観念と判断された項目(第1因子の25,9,7,29,第3因子の14,6が該当する)の因子負荷量が低く、概ね因子負荷量が絶対値0.5以下である。これは先行研究²⁴で向宗教性、靈魂観念と判定された他の項目に比べて低い数値である。また、除外された4項目の内3つが金児の研究では加護観念であった。これは現代の大学生にとって、金児の「風俗や年中行事としての軽い宗教との結びつきに親しみを感じ、自然にも敬虔な気持ちをもった宗教性」という説明²⁸によって表された加護観念が希薄になっている可能性がある。すなわち、宗教に対して抱いている思いが自然に生じるような抽象的なものではなく、上述したように人間社会もしくは個人に対して具体的な利益をもたらすかどうかによっているということが言えるのだろう。これはまさしく「宗教性」と呼ばれるものが変化したことの証左であると考えられる。

上述の大学生の宗教観の変化の理由は何が原因であるかを特定することは困難ではあるが、いくつか理由は考えられる。例えば、1991年からの30年の間に、オウム真理教事件による宗教への不信感の増加やインターネットの充実による生活様式の変化、阪神・淡路大震災や東日本大震災などの大災害により宗教観が大きく変化した可能性がある。宗教を疑問視する者も少なからず存在し、日常的な会話の中でも宗教的な話はタブー視されることが多いことから、若者は潜在的に宗教に忌避感を感じているため加護観念などの項目の因子負荷量が減少したのかもしれない。しかし一方、宗教との関わりの有無によらず、損得は自身の生活にとって重要である。そのため宗教的な項目であっても損得に関わる因子については、上述のように析出していた可能性がある。

また、社会情勢の大きな変化も考えられる。1991年はバブル景気の最終段階

であり、日本が非常に好景気な時代でもあった。この時代の学生たちは大学生に至るまで好景気を経験していたため、将来的な不安が今よりも現実的ではなく、その結果として宗教に対して今ほど強い利益の希求感情がなかったのかもしれない。一方、2022年に大学生であった者が生まれた時はすでに日本は不況の中であり、彼らの生育過程では日本はずっと不況であると教えられて育ってきている。そのような社会で生まれ育てられたことで、少しでも利益がある方がいいと思うようになるのは不思議なことではない。宗教というものに対しても信じるからにはなにかしらの利益、見返りが欲しいという感情も、不景気で得るものが少ない生活の中で抱くようになった可能性も十分に考えられる。

さらに言えば、1986年から1987年に行われた先行研究²⁴では親世代に比べて子世代の大学生は靈魂観念や個人主義的宗教が強いことが示されている。この差異が現代でも適用できるのであれば、現代の学生は親世代に近い1991年の学生よりもさらに靈魂観念や個人主義的宗教が強くなっている可能性がある。これは本実験の結果で、靈魂観念が残存している一方で宗教に対して個人の利益も求める傾向が示されたことと関連があるかもしれない。

一方で、1991年の金児の調査²⁴から2010年の小川の調査¹⁵までの変化が本実験との相違ほど大きなものではないことから、必ずしも宗教への不信感や忌避感の増加が原因ではないかもしれない。2020年度の國學院大學の調査³⁰によれば、2010年と比較して2020年では、全国の学生は宗教に対する関心が高まり、初詣に行く学生の率も増加している。また同調査での2015年と2020年の比較では、「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要だ」、「宗教を信じると、心のよりどころができる」と思う割合が増加する一方で、「一般的に宗教は、アブナイというイメージがある」と思う割合は減少している。これらの結果は本実験の結果とは一見するとそぐわない。解釈としては、宗教が大事だと思ふ割合が増えたがそれは宗教を心から信仰しているというわけではなく、宗教という資源から利益を得られるのではないかと考える学生が増えたから、と考えることもできる。

本実験の結果をまとめると、1991年と比較して大学生の宗教観はここ30年で変化しており、30年前に抱いていた宗教に親しみを感じ敬虔な気持ちを持つという宗教観は減少し、代わりに宗教に対してより具体的な見返りや利益を欲す態度という宗教観が増加したと考えられる。

なお死別体験については、その有無が個人の持つ宗教観に影響があると予想されたが、本実験では死別体験の時期が広範であるため、その影響を考察することができなかった。

将来的な研究としては、参加者の範囲を広げることが考えられる。本実験では東北大学の学生を対象にすることで、実質的に東北地方に注力した実験結果になっている。同様の実験を日本全国で行えば、大学生の持つ宗教観の地域差を調査することが可能となる。また、2022年7月に生じた安倍晋三銃撃事件に伴う特定の宗教団体への報道が学生の宗教観に及ぼした影響を調査することも可能である。奇しくも本実験は当該事件の直前での調査であったため、2023年現在において再度同様の調査を行うことは、事件前後の宗教観の変化を直接的に観察することができると考えられる。

本実験にはいくつかの限界が存在する。参加者が先行研究^{9,15,18,24}に比べて少ないために、因子分析が十分に行われなかった可能性がある。通常、因子分析は項目数の10倍の人数が適していると言われている。今回の場合は約300人が適正であるが、73人分のデータで因子分析を行っている。これがどのように影響しているかは不明であるが、因子分析の妥当性になんらかの影響があるかもしれない。

学生の出自も影響しているかもしれないが、詳細は不明である。金児の先行研究²⁴では関西都市圏の大学生を対象としていた。しかし本実験では東北の学生を対象にしている。金児の調査結果に類似している2010年に行われた小川の研究¹⁵での対象者も関西都市圏の大学生・大学院生であり、金児と小川の結果の類似性及び本実験での相違の大きさなどから、学生の出身地による文化的宗教的背景の違いが影響したことを否定することはできない。実際に東北大学の学生の4割程度は東北地方出身者であるため、地方の影響は十分に大きいと考えられ、今回の実験で得られた結果は全国的なものではないと思われる。

質問項目に関し一部の質問では用語説明を加えたが、他の質問に関して参加者から用語の意味がわからなかったという感想も見られた。小川の先行研究¹⁵では「水子供養」の意味がわからないという感想があったことから、本実験では水子供養の説明文を追加している。しかし本実験でも感想に針供養がわからないというものが存在していた。わからない項目に対しては回答が曖昧になり因子負荷量が正確に示されないかもしれない。感想はその1件だけであったが、

他の参加者が針供養を理解できていたかは不明である。しかしながら、感想がその1件だけであったこと、73人の回答の内「どちらかといえば賛成」、「かなり賛成」、「まったく賛成」と回答した参加者が64人（88%）と明確な偏りがあることから、参加者のほとんどは意味を理解していたと判断した。

また、本実験では「信仰心のない人は、心の貧しい人である」という項目があるが、金兎の先行研究²⁴では「信仰心」ではなく「宗教心」であった。実験終了後に誤りに気づいたため、訂正が間に合わなかった。しかし、学生の感ずるところの意味合いとしては大きな違いは存在しないと判断して、分析対象に含んでいる。

これらの限界の多くは解決可能なものであるため、将来的な研究ではより包括的な実験を実施することを目標としたい。

謝辞

本研究にあたり、多くの方にご協力いただいた。

本研究の元となる経文聴取実験において要をなす読経をしてくださった、真言宗僧侶の石井祐晃氏には本研究に際し無償でご協力いただいた。ここに感謝の意を申し上げる。

本実験では人の心理に触れることがあるため不測の事態も考えられる。そのため、万が一に備えて看護師の月原登美子氏にもご協力願った。氏のおかげで安心して実験を行うことができた。深謝申し上げる。

因子分析の際には知識がない私にご指導ご鞭撻いただいた、東北大学加齢医学研究所／災害科学国際研究所の杉浦元亮教授、神戸松蔭女子学院大学人間科学部の奥井一幾准教授には厚く御礼申し上げる。

本研究は、スマート・エイジング学際重点研究センター研究費、東北大学未来型医療創造卓越大学院プログラム及び、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2114の支援を受けたものです。

引用文献

1. 張日昇, 高木秀明. 大学生の宗教態度と宗教観に関する日中比較研究. 横浜国立大学教育紀要. 1989;29:121-135.
2. 松島公望, 橋本和幸. 宗教性尺度の作成. 日本青年心理学会大会発表論文

- 集. 2002:58-61.
3. 藤村和久. 家庭における生活意識の構造—測定尺度の構成—. 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要. 2003:2:129-138.
 4. 安藤延男. 宗教的情操の因子分析的研究. 教育社会心理学研究. 1962:3:54-63.
 5. 安藤延男. 宗教的情操尺度の標準化—主として基督教的立場から—. 教育社会心理学研究. 1963:4:143-155.
 6. 溝口靖夫, 茂洋. 神戸女学院学生及び生徒の宗教態度と宗教的行為に関する調査. 神戸女学院大学論集. 1965:12:39-72.
 7. 溝口靖夫, 西山美瑛子, 茂洋. 神戸女学院学生・生徒の宗教的態度と宗教的準拠集団について. 神戸女学院大学論集. 1966:13:1-39.
 8. 金児暁嗣. 宗教組織と信仰の機能 (IV) —浄土真宗門徒の宗教性に関する因子分析的研究—. 人文研究. 1982:34:658-686.
 9. 金児暁嗣. 大学生とその両親の死の不安と死観. 大阪市立大学文学部紀要. 1994:46:1-28.
 10. 松島公望. 日本人クリスチャンにおける宗教意識尺度の開発—プロテスタント教会—教派 (ホーリネス系教会) を対象にして—. 学校教育学研究論集. 2005:11:13-28.
 11. 西脇良. 子どもの宗教性発達に及ぼす祖父母および親の影響—大学生に対する質問紙調査から—. 日本心理学会大会発表論文集. 2006:70:0.
 12. 谷芳恵. 大学生の宗教観と幸福感に関する心理学的研究. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要. 2007:1:17-24.
 13. 横井桃子, 吉村英. 宗教が青年期の意識構造に与える影響. 京都女子大学発達教育学部紀要. 2010:6:81-90.
 14. 渡辺光一, 黒崎浩行, 弓山達也. 日米の宗教概念の構造とその幸福度への効果: 両国の共通性が示唆する普遍宗教性. 宗教と社会. 2011:17:47-66.
 15. 小川真由. 青年期の宗教性と生き方の関連 (研究 I). 花園大学心理カウンセリングセンター研究紀要. 2012:6:51-60.
 16. 白崎愛里, 菅村玄二. 妄想的観念と宗教性および批判的思考との関連. 日本心理学会大会発表論文集. 2012:76:0.
 17. 上田光世, 潮村公弘. 日本人のゆるしと自己観・集団主義・宗教性. パー

- ソナリティ研究. 2012;21:183-185.
18. 河野由美, 金児曉嗣. 浄土真宗僧侶の宗教性が精神的健康と死別後の心理変化に与える影響. 日本心理学会大会発表論文集. 2014:78:0.
 19. 山崎洋史. 宗教観が青年期適応に及ぼす影響. 宗教研究. 2016;89:221-222.
 20. 廣田信一. 宗教動機づけ構造に関する検討. 山形大学紀要. 2017;16:69-76.
 21. 石井辰典, 渡邊克巳. 心の理論か, 道徳的関心か?: 宗教的信念と社会的認知能力の関連. 日本心理学会大会発表論文集. 2019:83:0.
 22. 木村友昭, 鈴木清志, 片村宏, 牧美輝. 統合医療施設におけるがん患者の QOL とスピリチュアルな 態度の検討. 日本統合医療学会誌. 2020;13:118-127.
 23. 橋積洋子. 現代青年のスピリチュアリティと宗教意識, 宗教行動, ウェルビーイングとの関連に関する研究. 修士論文. 2009.
 24. 金児曉嗣. 日本人の宗教性 オカゲとタタリの社会心理学. 新曜社: 1997.
 25. 川島大輔. 老年期にある浄土真宗門信徒の死への態度と宗教性. 京都大学大学院教育学研究科紀要. 2006;52:266-279.
 26. 肥田野直, 福原真知子, 岩脇三良, 曾我祥子, D.Spielberger C. 新版 STAI. 実務教育出版: 2000.
 27. 小塩真司, 阿部晋吾, カトローニピノ. 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み. パーソナリティ研究. 2012;21(1):40-52.
 28. 金児曉嗣. 日本における近代的価値観と宗教意識の変質. 都市文化研究. 2003;1:23-35.
 29. 小林利行. 日本人の宗教的意識や行動はどう変わったか ~ ISSP 国際比較調査「宗教」・日本の結果から~. 放送研究と調査. 2019;(April):52-72.
 30. 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所編. 第13回学生宗教意識調査報告(2020年度) -改訂増補版-. 2022.
 31. Kanda Y. Investigation of the freely available easy-to-use software 'EZR' for medical statistics. Bone Marrow Transplant, 2013;48:452-8.

A Study of Religious Views of Japanese University Students Using Kaneko's Religious Views Scale :A Comparison with 1991

Taira TOKUMASU, Takafumi MORITA, and Yozo TANIYAMA

There is no definitive scale yet to measure the religious views of Japanese people; however, several studies have measured religious views by controlling for certain attributes of the participants. This experiment (N=73) conducted in 2022 compares the religious views of university students in the Tohoku region with those of today using the scale used in the study in 1991. A 25-item, three-factor structure was obtained. The factors differed from those in hitherto research in some respects: they represented belief in and awe of spiritual beings, expectations of the benefits that human society derives from religion, and the benefits that individuals derive from religion, respectively. These results indicate that over the last 30 years, students' religious views have turned more towards wanting a return or benefit from religion, rather than harboring a sense of familiarity with it. These changes may be correlated with significant changes in lifestyles and social conditions.

